

きょうと福祉倶楽部だより

2021年 10号

デリソフターが変えた 嚥下が困難な人の食事- Tさんの使用体験記

以前「福祉倶楽部だより」で紹介させていただいた食物を下で潰せるほど柔らかく加工する調理具「デリソフター」を在宅で利用するTさんに、使用の感想を書いていただきました。

Tさんは脳血管障害でお身体が不自由になりました。そんなTさんが再び楽しく食事の時間が楽しめるようになったことは嬉しいことです。デリソフターを紹介して良かったと感じています。以下Tさんの感想です。

食べる、という人間にとって幸せな時間をもう取り戻すことはできないと思っていた。私は働き盛りで子育ても進学や就職と父親ならではの役割を果たさなければならない54歳の時に脳出血になって倒れた。

それも二度も。2ヵ月も生死の間をさまよった。意識が戻った時、両手両足は動かず声が出ない。鼻から管を通され栄養を摂っていた。

「食べたり飲んだりもできない」現実を知る。

B級グルメとビールが大好きだった生活なんてできないのかと思うと無性に涙が出た。

半年後、退院した。身体に穴を開けて胃ろうから2食を摂り1食を口から摂れるようにリハビリをした。そこから在宅での介護生活が始まる。

昼間に働く妻なので、一緒に食事ができるのは夜ごはんだけになる。

だから必死で口を動かした。疲れている妻が作ってくれたものだから。米はいいものを使ってきている。おかずもなるべく一緒のメニューにするが、ミキサーで砕いてプリンの硬さにしてもらう。

同じメニューと言われてもドロドロの固まりにしか思えない。

緑色の野菜が入っていると濃淡はあるけれど緑のものでしかない。

味覚と嗅覚もマヒしており、食事というよりリハビリだった。

そんな私のところにデリソフターはやって来た。

妻が最初に商品説明会に行った時に持ち帰りが可能だったブロッコリーを食べて驚いた。

形はそのままで嚥下力の弱い私でも舌で潰して飲み込めた。

「まるで魔法」にかけたみたい驚いた。

倒れてから欲しいものなんて無かったが、これだけはなんとしても欲しかった。まずはブロッコリーから始めてもらった。それからずっと食べたかった庶民の味を求めた。お好み焼きに餃子、ハンバーグと。

4年間、食べたかった。もちろん妻は作ってくれている。でも自分だけ平らなお皿ではなかった。

それがみんなと同じ形になれる。それがうれしくてたまらない。

視覚から入ってくる情報は脳でも刺激しているのかな。これまではせっかく作ってもらった料理でもリハビリのようだった。味も時々しか分からない。例えば辛味は苦くなります。

それが見るとその味がしたような気になる。

お好み焼きではキャベツや肉の食感があるのだ。

以前の似たような味とは違う。あと驚いたのがスイーツだ。

元気な時は酒飲みで甘いものなんて食べなかった。

この体になってデザートと言えればプリンかゼリーしかなかった。

そこにパンケーキやカステラもそのままの形で食べられる。

人と同じ形象で食べられることは私に人としてのプライドを取り戻すことができた。

ささやかだけど夢がある。

お正月には遠くから子供が帰ってくる。

子供たちと同じ形のを食べながら、話しを聞いてみたい。

デリソフターとは
DeliSofter (デリソフター)
はギフモ株式会社が提供する調理家電。
いつもの手料理や市販の惣菜、
冷凍食品など。加齢や障害などで食べる事にお困りごとを抱える方々が食べ辛いと感じる肉魚料理を、見た目や味を変えず
やわらかくすることができます。

